

# 運動部に所属する大学生の就職活動に伴う恩恵と葛藤

情報科学ゼミナール 1313026 喜多 悠河

## 1. 研究動機・研究目的

「体育系大学生は就職に強い」と世間一般では言われている。確かに、株式会社ディスコリサーチ (2016) が行った体育会学生の就職活動調査によると、就職決定企業の従業員数では、「従業員数 5000 人以上」と答えた人が体育会学生では 55.2% に対し、一般学生は 36.4% である。この結果から、比較的運動部に所属している学生の方が大手企業を就職先としている傾向にあるということが分かる。しかし、大手企業を就職先としている人が多いからと言って運動部所属大学生の誰もが簡単に就職できるわけではない。

運動部に所属する大学生 (大学生競技者) に着目してみると、一般の大学生に比べて部活動役割を担っている分、多重役割の両立に悩んでいる。就職活動においてこのことは民間企業でのエントリー社数を比べてみると歴然で、一般の学生が平均 42.7 社エントリーしているのに対して、体育会所属学生は平均 28.8 社のエントリー数である。株式会社ディスコリサーチ (2016) によると体育会所属学生は、「体力的にしんどかった」、「業界分析・企業分析をする時間が限られてしまった」といったことを体育会に入っているから不利に思ったこととして挙げられているという結果が示されている。

そこで本研究では、多重役割マップ (MRM) を用いた山田の手法を用いて、ただでさえ忙しいと言われる運動部に所属する大学生の就職活動に関する恩恵と葛藤を明らかにすることを目的とする。これらを明らかにすることは、大学の部活動の運営機関や、部活動の顧問が配慮するための資料としての活用や、大学生競技者が就職活動を行うロールモデルとしての活用も期待される。また、運動部に所属する大学生の就職活動における葛藤と恩恵については、ワーク・スクール・コンフリクト同様に研究の歴史が浅い。大学生競技者の就職活動における葛藤と恩恵についてのナラティブ・エビデンスは、彼らの多重役割をめぐる新たな仮説が導かれるだけでなく、大学生競技者が就職活動と部活や授業などを両立し、より円滑に活動していくために役立つと期待される。

## 2. 研究方法

本研究は記入者が現在になっている多重役割の状況を紙面上に整理していく多重役割マップ (MRM) を用いて調査を行った。調査の対象は、J 大学のスポーツ健康科学部に所属する大学生のうち、就職活動を経験した体育会所属者 (適格基準)。調査を実施した 2016 年 11 月において、就職活動歴が短いと見込まれる、大学 3 年生以下は除外した (除外基準)。調査実施の同意を得た 8 名 (男=8, 女=0) のうち、MRM の作成において共通の構造を記述した 8 名 (男=8, 女=0) を有効データとした。8 名の記述した役割構造は、部活、ゼミナール、学校 (授業、学内行事)、息子、ひとりのときの私 (プライベート) である。MRM シートに記述される情報のうち、本研究が集計するのは NSP、PSP、補償、分離の有無 (2 区分変数) とそのエピソード (ナラティブ・データ) である。集計を行い、結果は NSP、PSP、補償ごとに集計した。

### 3. 主な結果と考察

本研究で行った調査で最も出現頻度が多かったのは、NSPでは部活動に関するエピソード、PSPにおいても部活動に関するエピソード、更に補償においても部活動に関するエピソードであった。分離は記載されていなかった。NSP、PSP、補償の全てにおいて部活のエピソードが最も多く、部活動役割が就職活動役割のみならず、学校、ゼミナール、息子、ひとりのときの私の全てに影響を及ぼしていた。

NSP、PSP、補償のエピソードを集計し構造化した結果はそれぞれ3つの表にまとめた。NSPの結果では、就職活動役割と部活動役割間で生じるNSPの出現頻度が最も高かった（就職活動→部活動=10, 部活→就職活動=3）。主な内容としては、就職活動役割から部活動役割へ時間が（3）、部活動役割から就職活動役割へ時間、感情、ストレインともに（1）スピルオーバーしていた。PSPの結果では、就職活動役割と部活動役割間で生じるPSPの出現頻度が最も高かった（就職活動→部活動=5, 部活動→就職活動=13）。主な内容としては、就職活動役割から部活動役割へ価値が（3）、部活動役割から就職活動役割へスキルが（8）スピルオーバーしていた。補償の結果では、全体的にエピソードが少なく発散、反動、コミュニティが数回程度出る結果になったが、補償においても就職活動役割と部活動役割間での出現頻度が最も高かった（就職活動→部活動=3, 部活動→就職活動=5）。

NSPにおいては就職活動役割と部活動役割のインターフェースで高頻度のNSPが認められている。つまり部活動を行い、就職活動に取り組んでいる大学4年生における部活動役割と就職活動役割において発生する役割葛藤における課題を解決していく必要があることを意味している。PSPのエピソード数はNSPのエピソード数よりも多く、ネガティブな面からのアプローチが多かった多重役割の研究において非常に有効な資料となり得る。補償においてはストレスの補償で「嫌なことも部活で忘れられた（就職活動→部活）」、劣等感の補償で「部活で嫌なことがあったが、自分が将来成長する糧となった（就職活動←部活）」、コミュニティの補償では「就職活動のストレスを部員が忘れさせてくれた（就職活動→部活）」といったエピソードが具体的に挙げられた。これらNSP、PSP、補償のエピソードが明らかになったことで運動部に所属する大学生の就職活動へ支援の方法が考えられるだろう。

### 4. 結論

今回の多重役割マップを用いた調査により、運動部に所属する大学生の就職活動に伴う恩恵と葛藤のエピソードが明らかとなった。

### 5. 卒業論文の執筆を終えて

就職活動と部活動を両立する困難さを自分自身がとても感じており、これから就職活動を行う運動部に所属する大学生が少しでも効率的に就職活動を進めてくれればという気持ちから本研究のテーマを決定しました。論文といえば、アンケートをとり、難しい解析を行って作成する印象だったのですが、解析を行わない記述研究を体験できたことは非常に貴重な経験となりました。調査に協力して下さった皆様、本当にありがとうございました。